

室生犀星研究

—復讐の文学—

植木紀子

室生犀星の文学の基調底音は、復讐の文学にある。その仮説のもとに、復讐の文学を、作品の上で、また作品に貫流する文学観としてそれを考えてみたい。そうすることによって犀星の文学が解明できればと思っている。

一、「復讐の文学」の内容について、

○私は文学といふ武器を何のために与へられたかといふことを考える。その武器は正義に従うことは勿論であるが、そのために私は復讐せよと命ぜられるのである。ただに良き忠実な作品を書くために生きるのには、みじめな限り……、

つまり、文学は武器である。そのために文学は正義に従って復讐するものとして存在する。と犀星は言う。

○我々の人生にも武器をとり、仮借なく最

つとあばくものをあばき、裁かねばならない。

というように、それがいかに人生の触れたくない傷跡であっても、容赦なくあばき尽さねばならないと言っている。

○幼少にして考えたことは遠大の希望よりさきに、先づ復讐せよといふ命令であった。復讐すべき武器をさがし、人生に於て復讐の徳に到達すべきである。

ここでは、この世に一たん生命を受けた者はみな、人生において復讐すべき武器を求めさがし、復讐の徳に達すべきなのだ。と主張している。

○汚辱を排し、正義につくために、数限りなく復讐のためのガタガタ震ひをやり、生き甲斐のあるところにたどりつく。

これが復讐の最終目標とみて良いと思う。

「復讐の文学」で犀星は、文学を正義に従うための武器であるとし、何等か人生にとつて役に立ち、書き甲斐のあるものに立ちむかうこと、それが文学者としての努めであると言う。彼にとつては、文学することはそのまま復讐することに通じる。復讐の対象に人生をすえ、その人生を容赦なくあばき、討伐するところに文学がある。幼少の頃から復讐せよという信条を持ち、その命令の中で育ってきた犀星が、どのようにして復讐の徳に到達し自己の生の認識にたどりついたのか、それを復讐の展開で見えていくことにする。

二、復讐の意識とその展開

このような犀星の文学理念が実践に移された時、その目的を最も効果的にこなしようのは、自伝という形式であろう。そこでこの復讐という理念のあらわれを自伝のうちに取り出してみることにしたい。

犀星には自伝的な作品と分類されるものは少くない。ここではそのうちの「幼年時代」

(大8) 「泥雀の歌」(昭16) 「杏っ子」

(昭31)の三つを取り上げて考察を進めることにする。そして今回は、出生から独力で復讐すべき武器を察めることを自覚する迄の人

生、つまり具体的には幼少年期に限定する。幼少の人生はどのように復讐されているか、各々の作品で自己の扱い方を考察することに よって、どの程度に復讐が表面化され、また消化されているか、その展開の様相を理解していきたい。

「幼年時代」

- 私はすぐお菓子をねだった。
- 母のひざに凭れてねむることがあった。
- 優しく言われると、あんなに強情を言ふんじやなかったとすまない気がした。
- 姉の暖い呼吸を頬に感じながら眠った。
- 遊び友達かる腕利として相当な尊敬を払われていた。
- 母のために祈った。
- 私は益々ひとりぼっちになった。
- 私は心からのびやかに幸福にくらした。
- 父と二人で静かにいろいろな話をし、これらの表現からみて。

- 1、子供らしく愛される少年
- 2、賢く活発で乱暴な半面さびしがりや
- 3、やさしい姉、父母に囲まれた暖い家庭環境

この人生では恵まれた少年が予想される。

「泥甕の歌」

- 私の最初にかんじた学校といふものは、先づいやな、きらいなものだった。
 - 友達といふものが出来ず、
 - 私は人に好かれぬ顔をしている、
 - 私は可愛いらしい子といふ言葉を、聞いたことがなかった。
 - 好かない子供という冷たい眼付と、いちわるらしい奴、きたない奴、子供らしくない可愛気のない奴と……
 - 母は奥に夥しい辛辣な言葉と、冷酷惨忍な鞭をもつて（中略）逃げ足の弱い私の前に立ちはだかる。
 - 完全に愛されたことのない人間の粗暴さと反逆の心が、私の性格の中にしこりのようなものとなって……
- これらにみられる自己の像は、
- 1、子供らしくない、可愛気のない子
 - 2、粗暴で陰気な少年
 - 3、冷たい周囲に依拠地をはってとけこもうとしない
- 不平で陰惨な少年期が考えられる。

「杏っ子」

- おかつは平四郎の耳をつまんで引き摺って行って……

- 眼はぐらく、肩先は怒り、しじゅう怒っていないければあられない風の子供の顔。
- 平四郎はおとなをおそれていた。
- この女中の子といふ言葉が吐かれると、なにくそといふ気がし、そこらじゅうを蹴飛ばして……

○かりにも母という名前の人間に立ちむかつては、平四郎の腕力はその半分も出切らないで……

主人公平四郎のイメージは

- 1、おどおどした小心な少年
- 2、粗暴ではあるが、単純ではない。
- 3、物事の見方、取扱いが客観的で、おとなっぽさが感じられる。

幼年時代の自分という一つの素材をはじくり返した時、このように異った主人公の像が生まれた。犀星は復讐すべき幼少年期の人生を三つの伝記で、それぞれ異った復讐をしている。つまり三形態の復讐がされたと言っても良いと思う。

まず「幼年時代」の人生は、後二者のそれに比べて、著しく都合の良い人生である。あはくべきものも、討伐すべき者もない。この作品においては復讐の対象のみならず、復讐の観念それ自身も犀星の内に定着してはい

ない。与えられた文学という武器は、復讐すべき人生が提示されたにもかかわらず仕事をしていないのである。「幼年時代」は「ただに良き忠実な作品」に終り、復讐のなされない自叙伝として位置づけられよう。

次に「泥雀の歌」の人生は、前者と両極を位する程に異っている。ここではかなり強硬に復讐している。あばくべきはすべてあばき少しの容赦もなく裁いている。頭が悪く陰気な少年や冷酷な周囲を、文学できりきざんだ時生まれてきた作品である。復讐が前面に押し出され、あれも討伐し、これも討った自伝であり、「復讐の文学」の主張を忠実に実行したモデルケースの作品といえる。

さて同じ復讐も「杏っ子」に至ると、主人公にせよ、その人生にせよ異った様相をもって復讐されている。「泥雀」はあまりにも人生、社会との対立が著しく、がむしゃらな姿勢があるに比し、この作品では醜くおどおどした少年や、乱暴で教養のない母に仮借のない裁きを与えながら、単純に討伐出来ない何かに気づいている。憎い母なのに立ちむかう時は恐くなる。そこにこの自伝の特色がある。「杏っ子」の復讐は非常に精密で客観的な分析が加わり、その復讐は完成したとみて

も良いと思う。すでに主人公のイメージが、復讐の文学観を背負ってもふらつかない。そして十分に屎星の内消化吸収された復讐として、この作品は生み出されたとみられる。「幼年時代」「泥雀の歌」「杏っ子」と復讐は深化発展しているのである。

三、屎星における復讐の意味するもの、
『私は何度か自叙伝の裏側や表側を書き、溝のやうなところや空地のやうなところや、日あたりの悪いあをざめた土地のやうなところを描いて……』（「泥雀の歌」後書）

文学という武器を持った屎星は、自叙伝の裏側、溝、日当りの悪い所といった既に遠くかすんだ過去の世界を書いた。それは書いても書いてもまだ残る何ものがあつたからである。それは又、次の自伝を生み出す母胎ともなる。これを私は「生」の实质と言っておきたい。屎星が執拗に生いたちに固執するのは、現に生きている自分の「生」の発生について知りたいという、一途な追求の姿と考えられる。自分がどのようにして生れ、育ったかということは、自分の現に持っている「生」を確かに認識することに等しい。

『作家といふものはその生涯をつくして、

絶えず自分をほじくり返してゐる者である。』

また

『私といふ作家はその全作品を通じて、自分をあばくことで他をもほじくり返し、その生涯のあいだ、わき見もしないで自分をしらべ、もっとも身近かな一人の人間を見つづけてきたのである。』（「杏っ子」後書）

と言っているのは屎星がいかに文学という武器をもって復讐することに生き甲斐を見出し、出ていたかを知るのに充分だろう。

生涯を尽して自分をほじくり返し、そこに自分の「生」をたしかめていった屎星の歩みは誤ってはいなかったといえよう。

このようにみていくと復讐の文学とは、ついに一人の作家の「生」を認識するための文学であると結論されるのではないか。

（本学 四年）